

中 学 校

平 成 4 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

音 楽

東 京 都 教 育 委 員 会

平成 4 年 度

教 育 研 究 員 名 簿 (音 楽)

区市町村名	学 校 名	氏 名
千代田区	麴 町 中 学 校	徳 永 千代子
大田区	羽 田 中 学 校	◎羽 鳥 紀 子
荒川区	第 七 中 学 校	河 村 晶 子
板橋区	桜 川 中 学 校	安 藤 聡
練馬区	石 神 井 中 学 校	酒 井 美恵子
足立区	蒲 原 中 学 校	○橋 本 裕 子
江戸川区	清 新 第 一 中 学 校	近 藤 泉
八王子市	恩 方 中 学 校	作 山 秀 樹
東久留米市	下 里 中 学 校	豊 田 ゆ み
羽 村 市	羽 村 第 三 中 学 校	鈴 木 泰 廣

◎世話人

○副世話人

担当 教育庁指導部高等学校教育指導課指導主事

山 田 日出雄

目

次

自主的に活動できる生徒を育てる指導の工夫

I 主題設定の理由	2
II 研究の経過	3
III 研究の内容	4
<指導事例1> 歌唱～より豊かな表現を目指して(課題学習を通して).....	4
<指導事例2> 器楽～アンサンブルの楽しみ	9
指導事例3と指導事例4の共通のねらい	14
<指導事例3> 鑑賞～名曲のメロディーに親しむ	16
<指導事例4> 鑑賞～僕も私も名演奏家	19
指導事例3と指導事例4の共通のまとめ	22
IV まとめと今後の課題	24

研究主題

自主的に活動できる生徒を育てる指導の工夫

I 主題設定の理由

新中学校学習指導要領の完全実施を来年度に控え、今、まさに中学校教育は大きな転換期にある。新指導要録における評価の観点での、「関心・意欲・態度」の示し方にも見られるように、生徒に自ら学ぶ意欲をもたせ、主体的に学習する態度を身に付けさせることが、今後、一層重要になってくる。このことは、音楽科の目標である「音楽性の伸長」、「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性の育成」及び「豊かな情操の養成」を達成するための根拠をなすものとしてとらえておく必要がある。

さて、我々、音楽科教育を担当する教師が、絶えず工夫し、解決を図っていかなければならない課題として、以下のものが挙げられよう。

- ・基礎・基本の定着を図る指導内容・方法の工夫
- ・創造的な表現能力と幅広い鑑賞能力を高める指導内容・方法の工夫
- ・生徒を自主的かつ主体的に学習させるための指導内容・方法の工夫

もちろん、各学校ごとの課題は、地域や学校及び生徒の実態の違いによって多様である。しかし、上記の課題は、多くの音楽科担当教師のもつ共通した課題といえるであろう。つまり、音楽教育上の根本的な課題と言えよう。

我々は、本年度の研究を推進するに当たり、これらが課題となってきた背景には、教師主導に偏った指導が大きな原因をなしているのではないかとの仮説を立てた。基礎・基本の定着を図ったり、音楽のもっている美的価値を理解させたりするためには、確かに教師の指導性に待つべきものが多い。しかし、ややもすると興味・関心、能力、適性といった、生徒一人一人の特性に十分対応できていなかったという状況もあったのではなかろうか。生徒が自ら伸びようとする意欲や、自発的な学習態度の芽を摘み取り、時には、「音楽嫌い」の生徒をつくってしまったことはなかったであろうか。

生徒の学習意欲を高めるためには、「できる喜び」「分かる楽しさ」を味わわせることのできる指導の工夫が必要であろう。冒頭にも述べたように、これからの教育は、生徒が自ら学ぶ意欲をもち、生涯を通じて学び続ける意欲や態度をもてるように援助することが重要である。そのためには、今までの指導法からの発想の転換を図り、生徒が主体的に学習を進めていけるような授業の在り方、また、表現することや鑑賞することが楽しいと感じられるよ

うな授業の在り方を工夫することが重要であると考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ 研究の経過

本年度の研究員の部会が発足後、5月の例会まで主題設定のための検討を重ねた。その後の経過は以下の通りである。

<6月>

自主的な活動を取り入れた指導法について、研究員の日常の教育実践に基づいた話し合いを行った。

<7月>

「自主的に活動できる生徒」とはどういう生徒なのか、事前に行った研究員対象のアンケートをもとに意見交換していく中で、次のような共通するイメージが浮かんできた。

- ①学習内容に関して意欲や興味・関心をもっている。
- ②自分で目的（学習目標）をもつことができる。
- ③目標達成に向けて自分から工夫できる。

この話し合いは引続き8月にも行うことになった。

<8月・御岳集会>

ここでは、具体的な事例研究を進めるため、各事例ごとのグループによる話し合いを中心に研究を深めた。また、必要に応じて、全員で、あるいはメンバーを入れ替えたグループによる話し合いも交えながら、研究する題材や授業展開の方法等について検討を進めた。

<9月以降>

器楽の指導事例を皮切りにして、各事例とも実証授業を重ね、研究内容の見直しを行った。また、各事例の充実を図るため、定例会の他に必要に応じて分科会を設け、検討を深めた。特に留意した点は、すべての事例を全員で検討し、共同研究の長所ともいえる、より一般的で実践的な指導事例が作成できるように研究を推進したことである。

なお、指導事例には、あえて対象学年を記していないが、それは、次のような理由による。各指導事例は、主題による題材設定を行っているため、取り扱う教材の選択の仕方によって、どの学年でも取り扱うことが可能であると考えたからである。

Ⅲ 研究の内容

<指導事例1> 歌唱～より豊かな表現を目指して(課題学習を通して)

1. 題材設定の理由

従来の歌唱指導は、主に教師が主体的に授業を展開してきた。例えば、「音取りをさせること」「歌詞の内容を説明すること」「曲にふさわしい表現をさせること」などを教師が生徒に教えることで歌を仕上げていく、という方法が、歌唱の授業で多くみられたのではないだろうか。もちろんこういった指導によってこそ、生徒に「響きの美しさ」「ハーモニーの豊かさ」「歌詞と曲が一体となった表現の素晴らしさ」などを味わわせることができるとも言えよう。しかし、生徒が生涯を通じて、歌に親しみ、自ら表現することの喜びを味わえるようにするためには、生徒に課題をもたせ、主体的に解決していく喜びを味わわせることが必要であろうと考え、本題材を設定した。また、教材を「荒城の月」にしたのは、新中学校学習指導要領の共通歌唱教材であることと、美しい主旋律をもち、しみじみとした味わいの歌詞であるため、心情を味わわせ表現を工夫させるためにふさわしい楽曲であるからである。

2. 指導目標

- (1) 歌唱表現に対する自らの目標をもたせ、進んで学習に取り組ませる。
- (2) 「荒城の月」の詩の内容を理解させ、その心情が表現できよう工夫させる。
- (3) グループごとの課題を発見し、互いに協力して解決しようとする態度を身に付けさせる。

3. 教材

「荒城の月」 土井 晩翠 作詞

滝 廉太郎 作曲

4. 指導計画(4時間扱い)

あらかじめ、グループで音楽を仕上げる体験をさせておく。また、漢詞調の歌詞を自分なりに口語体にしてくる課題をだす。その際、参考にできる資料を提示する。

第1時 自分の歌唱上の特徴と課題を見つけさせる。

詩を理解させる。

班ごとに練習計画を立てさせる。

第2・3時 課題解決及びふさわしい表現を目指して練習させる。

第4時 班ごとに発表させる。

評価させ合う。

今後の学習に生かすための課題を、一人一人に確認させる。

5. 学習の展開

第1時

	指導内容	学 習 活 動	評価の観点	指導上の留意点
導 入	ねらいの説明	- 学習のねらいを知り、既習曲を歌いながら、自らの歌唱上の課題を発見する。 - チャートに記入する。(資料1)	☆適切な課題が見つけれられたか。	★一人一人に適切な助言を行う。
展 開	- 詩の内容の理解 - 主旋律の紹介 - 主旋律の音取り - 選択曲の紹介 - 目標の設定	- 各自が調べてきた口語体の詩を発表し合う。 - 教師から、口語体の詩を習い、理解を深める。 - CDで曲を聴き、曲の雰囲気を感じ取る。 - 主旋律を歌唱しながら、曲の雰囲気を探る。 4種類の選択曲を聴き、それぞれの特徴を知る。 - 班で話し合い、各自の歌唱上の特徴や課題を考慮して、1曲選択する。 - 班ごとに課題を見つけ、計画を立てる。(資料3)	☆分かりやすく表現できたか。 ☆それぞれの特徴をとらえられたか。 ☆全員が話し合いに参加したか。 ☆課題に応じた計画を立てたか。	★集中して聴かせる。 ★特徴の書かれた楽譜を配布する。(資料2) ★班編成はクラスの実態に応じて工夫する。
ま と め	課題の発表	曲の選択理由、課題の設定理由及び練習計画を発表し合う。		

第2・3時 (準備) 使用する教具(CD, テープ, 楽器等)を班ごとに用意しておく。

	指導内容	学 習 活 動	評価の観点	指導上の留意点
導	課題の確認	「荒城の月」の主旋律を歌		

入		唱し、自らの課題を確認する。		
展 開	◦課題解決のための練習	◦班ごとの計画に沿って学習する。(音取り、歌い合わせ、楽器の工夫等)	☆計画に沿って全員が協力して活動できたか。	★計画通りにいかない班に、適切な助言をする。
ま と め	◦反省の発表	◦班ごとに反省を話し合い、記入し、発表し合う。		

第4時 (準備) 評価カードを印刷しておく。

教具の準備をさせておく。

	指導内容	学 習 活 動	評価の観点	指導上の留意点
導 入	◦課題の確認	◦「荒城の月」を歌いながら前時の復習をする。		
展 開	◦評価方法の理解 ◦練習 ◦発表と評価	◦評価カードの趣旨や利用方法を理解する。 ◦班ごとの表現を工夫する。 ◦発表する。 ◦お互いに評価する。	☆全員が生き生きと表現できたか。	★進行を援助する。
ま と め	◦評価	◦評価について話し合う。 ◦教師から評価を聞き反省する。 ◦チャートで課題解決の確認をし、次の課題を設定する。		★チャートを再配布する。

6. 考察と課題

従来の教師主導型の授業を、生徒の立場で考えると、「守りの授業」というとらえ方ができるであろう。それに対して、今回の「課題を生徒自身が設定し、解決を目指す」という生徒主体型の授業では「攻めの授業」という性格が現われた。生徒が攻めて「勝ち取るもの」は、「自分たちの力で目標を達成した喜び」である。今回の実証授業でも、生徒たちの「攻めるための手段や工夫」を見ることができた。例えば、リーダー性を発揮して仲間をまとめてくれたり、鍵盤楽器を使える生徒が積極的に音取りをしてくれたり、声の大きく美しい生

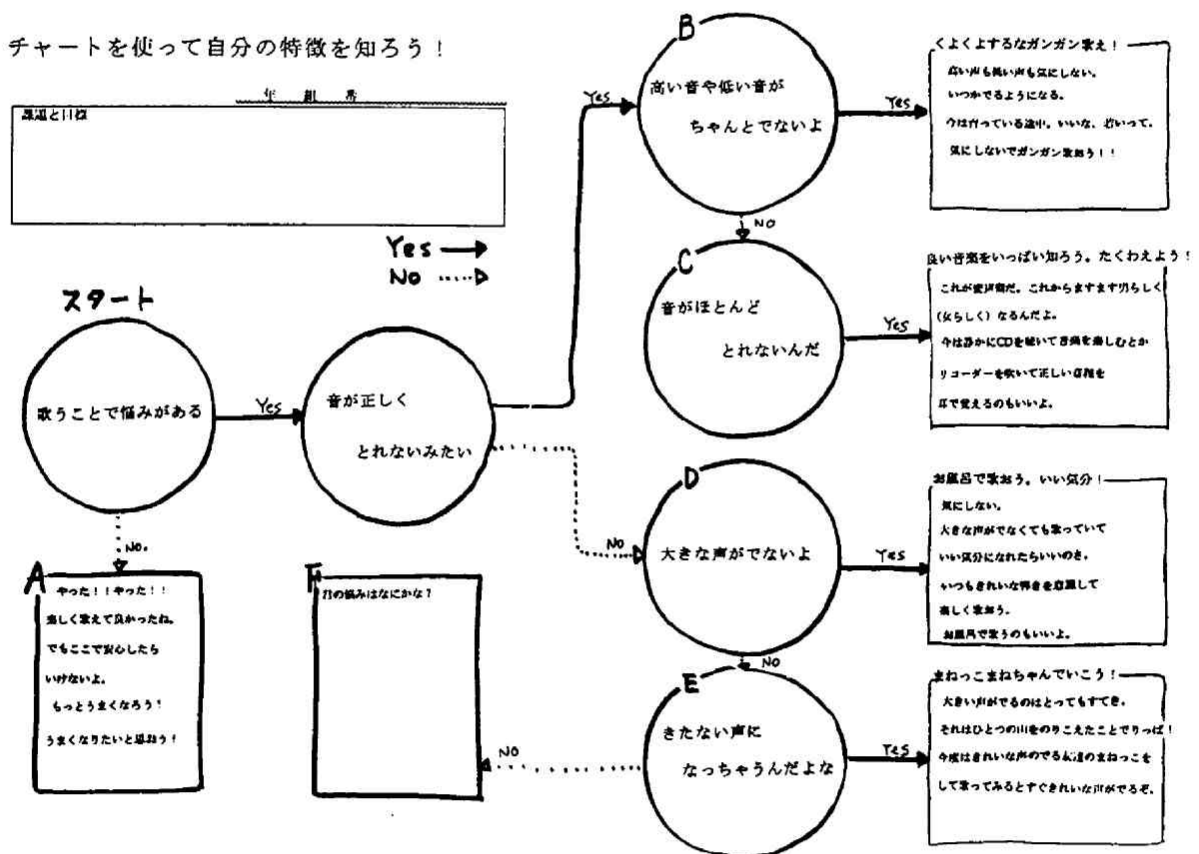
徒が仲間に認められて良い影響を与えてくれたりするなど、互いに励まし合って良いものをつくろうとする様子が多く見られた。

本事例のように、生徒に自らの課題を発見させ、その解決に向けて主体的に学習に取り組ませていく方法では、事前の綿密な指導計画が重要であることは言うまでもないが、更に重要なのは、日常の授業において、「歌唱表現のための基礎・基本とは何か」を、生徒が把握できるように留意した指導がなされることである。何が自分の課題なのかを見つけられず、ただ、手をこまねている生徒も残念ながら見られ、日常の指導に対する大きな反省材料としたい。

7. 資料

(資料1)

チャートを使って自分の特徴を知ろう！



(資料 2)

①タイプ (混声2部合唱) はじめから終わりまで2部合唱。男声が少々難しいがとてもきれい。

②タイプ (混声2部合唱) 後半が2部合唱。男声の音域があまり広がらないので歌いやすくハーモニーもきれい。

③タイプ (斉唱) チャートでDタイプが多い班はこのタイプで取り組んで協力して仕上げてみよう。

④タイプ (混声4部合唱) かなりの努力が必要だが、仕上がりの感動は保証します。Aタイプが多い班は挑戦してみよう。

荒城の月 ①タイプ (混声2部合唱)

荒城の月 ②タイプ (混声2部合唱)

荒城の月 ③タイプ (編曲 SAKU)

(資料 3)

＜荒城の月＞を協力して美しく歌おう！

1. チャートをもとに自分たちの班の特徴を記入しよう。

2. 1を参考に自分たちにあっていると思われるタイプの＜荒城の月＞を選びどんな点に注意して美しく歌えたらよいかを話し合って記入しよう。

3. メンバーを記入しよう。
リーダー***

上のパート***

下のパート***

4 計画を立てよう。

① 計画に使うもの

--

② 計画

時間や曜日	練習内容

5. 授業時間の終わりにその時間の反省をしよう。

6. 発表するときに特に気を付けることを2を揃えて書こう。

年 組 班

＜指導事例2＞器楽～アンサンブルの楽しみ

1. 題材設定の理由

器楽による表現活動では、楽器のもつ音色の生かし方を考えたり、楽器の組合わせ方を工夫したりすることによって、様々な音楽表現を楽しむことができる。しかし、楽器の演奏技術や読譜上の問題から、器楽の表現活動に対して苦手意識をもつ生徒も多い。こういった状況が、授業に対する、生徒の興味・関心、意欲に大きな影響を及ぼしているものとする。そこで本事例では、比較的、演奏技術上の取扱いが簡単なリズム楽器を、アンサンブル活動にできるだけ多く取り入れることにより、すべての生徒が器楽の表現活動を楽しむことができるようにした。また、グループ学習の形態で授業を進めることにより、生徒が主体的に取り組み、器楽合奏の喜びを体験できるようにすることをねらいとした。

2. 指導目標

- (1) 曲想やリズムに対する興味・関心をもたせる。
- (2) 曲に合ったリズムの表現を工夫させる。
- (3) アンサンブル活動を通して主体的な学習態度を養う。

3. 教 材

- | | | | | |
|---|-----------|---------------|-----|--------|
| A | オーラリー | プールトン作曲 | へ長調 | 4分の4拍子 |
| B | ラクカラチャ | メキシコ民謡 | へ長調 | 4分の3拍子 |
| C | オブラディオブラダ | レノン&マッカートニー作曲 | ハ長調 | 4分の4拍子 |

4. 編成及び使用楽器

各グループを5～6人編成とし、旋律系とリズム系が半分に分かれるように指示をする。

(1) 旋律系

◇ピアノ ◇オルガン（電子オルガン） ◇リコーダー ◇アコーディオン ◇木琴
◇鉄琴

(2) リズム系

◇バスドラム ◇スネアドラム ◇コンガ ◇ボンゴ ◇カウベル ◇トライアングル
◇クラベス ◇シンバル（H. H） ◇ウッドブロック ◇マラカス ◇タンバリン
◇カバサ ◇シェーカー ◇ギロ ◇カスタネット

5. 指導計画（4時間扱い）

第1時 教材曲を聴かせ、演奏したい曲を選択させる。

選択曲の練習をさせる。

第3時 曲に合ったリズム伴奏を工夫させるとともに、リズム楽器を加えてより豊かな表現で演奏させる。

6. 学習指導の展開

	指導内容	学 習 活 動	評価の観点	指導上の留意点
導 入	○ 本時の学習の ねらいの説明	○ 学習のねらい及び方法を知る。		★プリントを配布する。
展 開	○ 教材の紹介と 選択	○ 教材曲をテープ等で聴く。 ○ グループで演奏したい曲を選択する。(学習カードに記入)		★学習カードを配布する。 ★教材曲をどのように工夫できるか、簡単なアドバイスを与える。
		○ グループごとに選択曲の練習をする。	☆意欲的にグループ活動に取り組めたか。	★ポイントをつかめていないグループには助言する。
ま と め	○ 選択曲の発表 と本時の反省	○ どのような理由でこの曲を選んだのかを発表する。 ○ 本日の練習の様子や反省を学習カードに記入する。	☆グループで練習がスムーズにできたか。	

	指導内容	学 習 活 動	評価の観点	指導上の留意点
導 入	○ 本時の学習のねらいの説明	○ 学習のねらい及び方法を知る。		★学習カードを配布し、前時のチェックを行う。
	○ 表現の工夫	○ 他の曲（メヌエット、ラバー		

				する。
ま と め	グループの発表と練習の反省	- 練習が進んでいるグループの演奏を鑑賞する。 - 練習の様子や反省を学習カードに記入する。 - 次時の発表の心構えをする。	☆他のグループの表現の工夫が聴き取れたか。	★表現の工夫を深めたい部分を確認する。

第4時

	指導内容	学 習 活 動	評価の観点	指導上の留意点
導 入	- 課題の確認 - 評価の出し方の説明	- グループごとに表現を工夫する箇所を確認する。 - 評価表を見ながら説明を聞く。		★評価表を配布する。
展 開	- グループ練習 - 発表	- グループごとに発表に備えて練習する。 - 全員の前で工夫した点を発表し、演奏する。	☆アンサンブルに進んで取り組もうとしたか。 ☆他のグループの表現の工夫を聴き取れたか。	★練習がうまくいくように助言する。 ★工夫した点に気を付けて聴かせる。
ま と め	評価	- 評価表をまとめる。 - 教師からの講評を聞く。		★公平な評価になるよう注意させる。

7. 考察と課題

「音楽は好きだけど、音楽の授業は嫌い。」という生徒が少なくない。生徒の興味・関心、意欲を高める授業を展開していくためには、生徒が自ら考え、活動していくことのできる学習内容・方法を工夫しなければならない。

現代の中学生の音楽への接し方を見ても、多くの生徒が、日常生活の中で音響機器を気軽に使いこなし、自分の好みの音楽を楽しんで聴いている。興味・関心のある音楽への偏りはあるにしても、「聴いて、音楽の特徴をとらえる。」という能力は十分に身に付いているものと思われる。現代の中学生に見られるこのような実態を授業に生かしたいと考え、本事例に取り組んできた。

指導事例3と指導事例4の共通のねらい

音楽の基礎的な知識や演奏技能が十分に身に付いていない生徒にも、「名曲の鑑賞」を通して、音楽の「良さ、美しさ」に触れさせることができる。更に、楽しく味わわせ、深く聴きとらせることにより、「より良い音楽観」が育成されることも期待される。

そこで、とかく受け身になりがちな鑑賞の授業に、生徒を自主的に取り組ませるためには、「聴きたいという意欲」を喚起させる必要があると考え、意欲の喚起する指導方法を事例3と事例4の共通の研究のねらいとすることにした。

これまでの鑑賞の授業形態は、作曲者の生い立ちや楽曲解説、時代背景などを教師主導の形で説明することが多かったのではないだろうか。生徒に知識を与え、理解を深めさせることにより、鑑賞への興味・関心を高めることも重要な指導方法であるが、本年度の主題「自主的に活動できる生徒」の視点から鑑賞の授業形態を考察したとき、これまでとは別の方法による指導形態の工夫が必要となった。そこで、生徒にどのような「自主的な活動」をさせられるかの具体的方法について、以下の内容を検討した。

(ア) 鑑賞してから何かする。

○感想文の作成（発表する）

＊今まで安易に扱ってきたが、より「自主的な活動」として取り扱う方法はないか。

○表現（打楽器、歌唱、リコーダーなどの演奏 — 個人やグループ練習 — 発表）

＊関連曲などを演奏する。（演奏技能の個人差が大きいという問題がある。）

○創作（詩、絵、物語などを書く。）

＊大きな感動を受けても、文章や絵などの表現力の問題から、うまく表現に結び付かない場合もある。そこで、多くの選択肢のある創作課題を与え、生徒一人一人の能力、適性に応じる必要がある。

(イ) 鑑賞と平行して何かをする。

＊テープやCDなどに合わせて、その一部分を演奏する。

＊(ア)と同じような内容が考えられるが、他に考えられる内容はないか。

(ウ) 鑑賞に向けて、何かをしてから鑑賞をする。

＊知っていることが意欲を喚起する。そこで、主題などを事前に練習しておく。

また、「鑑賞」の領域に「表現」の領域を取り入れた指導方法では、ややもすると、本来の鑑賞そのものよりも、表現に偏った内容になりはしないかといった不安材料についても検討を深めていった。

これらの内容について決定的な結論を導き出すには至らなかったが、「聴きたいという意欲を喚起すること」をねらいとした上で、「表現」や「創作」をそのための手段として利用した鑑賞指導の展開を試みることにした。

一つは、「＜指導事例3＞ 鑑賞 ～ 名曲のメロディーに親しむ」である。

楽譜の知識や演奏技術が十分に身に付いていなくても、音楽の鑑賞を通して深い感動を味わうことはできる。しかし、生徒は、未知の曲を鑑賞するよりは、その曲を少しでも知っている方が、より興味をもって鑑賞する。

そこで、この事例では、これから鑑賞する数曲の、それぞれの中心となる旋律を、アルトリコーダーで演奏させる。それによって、それぞれの曲に興味をもたせ、生徒一人一人に、自ら興味のもてる曲を見つけさせ、「鑑賞しようとする意欲」を喚起しようとしたものである。リコーダーの演奏よりも、あくまでも鑑賞に主眼を置くことに留意し、できるだけ演奏しやすい旋律のある楽曲を選曲するとともに、生徒が、自らの演奏技術に応じて選択できるよう、教材の設定に工夫した。

二つめは、「＜指導事例4＞ 鑑賞 ～ 僕も私も名演奏家」である。

スピーカーから流れる一流演奏家の演奏に、グループアンサンブルの形態で自分たちもリズム表現をしながら同時演奏を体験する。

テンポに合わせてリズム表現をするには、鑑賞する時の注意力が相当重要になってくる。注意深く聴きながら演奏することにより、音楽の微細な表現までも感じ取ることも可能である。一流の演奏家との共演という擬似体験を通して、「より質の高い音楽への興味」をもたせ、意欲的に鑑賞しようとする気持ち」を育てることをねらいとした。

なお、リズム楽器を中心にして取り扱ったのは、生徒の楽器の演奏技能に個人差が大きく、生徒によっては使用できる楽器も限られるからである。前記のとおり、本事例は、あくまでも「鑑賞」を中心とした指導の展開例であるため、楽器の演奏技術習得には、できる限り時間を使用せずにすむよう、また、生徒の注意力を「鑑賞」そのものに向けるようにするためである。

事例3と事例4は、共に「よりよい音楽観の育成」と「より質の高い音楽への興味付け」をねらいとしている。

<指導事例3> 鑑賞～名曲のメロディーに親しむ

1. 題材設定の理由

鑑賞の授業において、楽曲の演奏をじっくりと聴かせ、その楽曲のもつ美しさや良さを生徒に十分味わわせることは重要であり、そのような授業の姿こそが、本来の鑑賞の授業であると言える。しかし、現実には、数十分間の鑑賞時間を心から楽しみ、感動を味わうことができる生徒は数少ない。その理由の一つに、鑑賞曲に対して、生徒が親しみをもてる機会が少ないということが挙げられよう。

そこで、本事例では、鑑賞曲の主要メロディーの先行体験を、リコーダーの表現活動を通して十分に行わせるよう工夫し、鑑賞曲に対する興味・関心を高めるようにした。

2. 指導目標

- (1) 鑑賞曲の主要メロディーに親しませる。
- (2) リコーダーによるメロディー表現を工夫させ、創造的な表現力を身に付けさせる。
- (3) 積極的な鑑賞態度を育成する。

3. 教 材

- A グリーグ作曲 ピアノ協奏曲 イ短調 作品16
- B チャイコフスキー作曲 ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23
- C ラフマニノフ作曲 パガニーニの主題による狂詩曲 作品43 第18変奏より

4. 指導計画（2時間扱い）

第1時 リコーダーの基本的な奏法を確認させ、自らの表現技能に応じた演奏を工夫させる。

鑑賞曲の主要メロディーを聴かせ、表現の参考にさせる。

第2時 鑑賞曲の主要メロディーを演奏させ、その印象をまとめさせる。

鑑賞曲の原曲を聴かせる。

原曲の鑑賞前と後の印象の変化をとらえさせ、感想を発表させる。

5. 学習指導の展開

第1時

	指導内容	学 習 活 動	評価の観点	指導上の留意点
導	○リコーダー の奏法、運指 の確認	○既習音でロングトーンや音階の 練習をする。		★音色や音量に 注意させ、楽譜 にある音の運指 を理解させる。
入	○本時の学習	○学習の方法を知る。		

	のねらいの説明	(楽譜の配布)		
展 開	- 各メロディーの鑑賞 - 各メロディーの階名唱 - 練習(個人練習)	- 楽譜を見ながら、リズムに注意して、メロディーを聴く。 - 各メロディーを階名で歌い、憶える。 - 少なくとも一曲のメロディーは演奏できるようにする。	☆各メロディーの特徴がつかめたか。 ☆メロディーの特徴をうまく表現できたか。	★メロディーの音を聴かせる。 ★机間巡視して適切な助言を与える。
ま と め	- 各メロディーの演奏(全員による) - 次時への連絡	各メロディーを演奏する。	☆各メロディーに興味・関心をもったか。	★リコーダーの苦手な生徒にも可能な限り演奏に参加させる。

第2時

	指導内容	学 習 活 動	評価の観点	指導上の留意点
導 入	- 前時の復習 - 鑑賞メモ用紙の配布、説明	- 各メロディーを演奏する。 - 鑑賞メモ用紙の活用方法を知る。		★一人一人の表現技能に応じた演奏をさせる。
展 開	- 鑑賞メモ用紙への記入 - 原曲の部分鑑賞 - 各メロディー	- 各メロディーについて好きな順位を決め、感想を書き、発表する。 - 各メロディーが原曲のどの部分か注意して鑑賞する。 - 各メロディーの原曲鑑賞から得た感想を書く。また、好きな順位を決めて発表する。 - 原曲の響きや広がりを想像しな	☆原曲を聴いて各メロディーの印象の違いを感じ取れたか。 ☆メロディー演	★順位と感想は直感的なものでよいことを知らせる。 ★作曲者や演奏形態について簡単に触れる。 ★鑑賞は一部分のみとする。 ★和声伴奏を付

	一の演奏（全員による）	がら、各メロディーを演奏する。	奏に意欲的に取り組み組んだか。	けて演奏させる。
まとめ	○本時のまとめ	○各楽曲のメロディーについて、原曲の鑑賞前と鑑賞後の印象の違いをまとめさせる。	☆各楽曲に興味をもち、積極的に鑑賞しようとしたか。	

6. 考察と課題

本事例では、名曲のメロディーに親しませることを第一のねらいとしているので、リコーダーの演奏技能の伸長には、あまり時間をかけてはいない。そこで、教材となる楽曲のメロディーを演奏しやすくするために、場合によっては、教師が前もって編曲しておく必要がある。また、本事例の工夫点として、鑑賞メモ用紙の活用を図ったことが挙げられるが、これにより、生徒の楽曲への興味・関心の変化の様子や音楽の好みの傾向を把握することができたことは、大きな収穫であった。

7. 資料

「名曲のメロディーに親しむ」鑑賞メモ用紙

氏名				
楽譜NO	A	B	C	
山名	ピアノ協奏曲 イ短調 作品18	ピアノ協奏曲第1番 変ロ短調 作品23	パガニーニの主題に よる狂詩曲第12番	
作曲家名	グリーグ	チャイコフスキー	ラフマニノフ	
好きな理由				
原曲の鑑賞 前				
原曲の鑑賞 後				
まとめ				

「名曲のメロディーに親しむ」
米印まで演奏できれば良い。

A

B

C

<指導事例4> 鑑賞へ僕も私も名演奏家

1. 題材設定の理由

鑑賞の授業において、従来から行われてきた指導方法は、楽曲の聴取とその楽曲の背景等への知的理解が優先されたものであり、生徒にとっては、どちらかと言えば受け身の形にならざるを得ないものであった。本年度の研究主題である「自主的に活動する生徒の育成」を図るには、鑑賞の授業においても、生徒の能動的な活動を伴う指導内容・方法が効果的であると考え、表現活動と鑑賞活動の同時体験を取り入れた授業形態の工夫を行った。具体的には、プロの演奏の聴取に合わせた、楽器による表現活動の同時進行を行うものである。この活動を通して、生徒は楽曲のもつリズムやフレーズを全身で味わうことができるとともに、その準備段階では、楽曲に、どんな楽器がどのように使われているかを聴き取ることが必要になるため、楽曲をより深く聴こうとする態度を養うこともできる。鑑賞の授業を、「聴かせる」のみの授業から「活動を伴う」授業へ転換することは、「鑑賞」そのものへの生徒の興味・関心等を喚起し、「聴く喜び」を味わわせることにつながるものと考えられる。

2. 指導目標

- (1) 楽曲のリズムやフレーズを同時体験させ、楽曲を身近にとらえさせる。
- (2) 楽曲の雰囲気にあった即興的なリズム表現を工夫させ、グループごとに発表させる。
- (3) 自ら注意深く鑑賞しようとする態度を育て、楽曲をより深く味わおうとする意欲をもたせる。

3. 教材

A ビゼー作曲 歌劇「カルメン」より“第一幕への前奏曲”の冒頭から66小節間

B ラベル作曲 「ボレロ」の219小節目から36小節間

(あらかじめカセットテープに編集しておき、カセットデッキをグループ数分用意する。)

4. グループ編成及び使用楽器

各グループを5～6人で編成する。

◇ティンパニー ◇バスドラム ◇スネアドラム ◇シンバル ◇トライアングル

◇各種鍵盤打楽器 ◇その他

5. 指導計画(2時間扱い)

第1時 二つの曲の同時演奏を体験させる部分を聴かせ、グループごとにどちらかを選ばせる。

同時演奏体験をするための楽器分担や工夫をさせ、練習させる。

第2時 グループごとに同時演奏体験の発表を行い、原曲(全曲)を鑑賞させる。

6. 学習指導の展開

第1時

	指導内容	学 習 活 動	評価の観点	指導上の留意点
導 入	○学習のねらい の説明	○学習のねらい及び方法を知る。		★2曲について 簡単に説明し、 学習活動の手順 を把握させる。
展 開	○2曲を鑑賞 ○楽器の説明 ○選曲 ○グループによ る学習	○それぞれの曲の同時演奏体験 を行う部分を聴く。 ○原曲に使用されている楽器や 使用可能な楽器及びその使用法 を知る。 ○グループでどちらの曲を選ぶ かを相談し、決定する。 ○グループごとに曲を聴きなが ら、使用する楽器及び担当者、 リズムなどを相談し練習する。 (一つしかない楽器は交替で使 用する。)	☆曲のムードや リズムを感じと ることができ たか。 ☆曲の細部に至 るまで注意深く 聴くことがで きたか。	★独特なリズム や特徴的な音に 注意させる。 ★最低限必要な 楽器や不可欠な リズムなどを提 示する。 ★グループごと にアドバイスを 与え、原曲には ない音も工夫さ せる。
ま と め	○次時の予告	○グループ発表の際の留意点を 知る。		★並び方や音出 しの合図などを 知らせる。

第2時

	指導内容	学 習 活 動	評価の観点	指導上の留意点
導 入	○前時の復習	○グループごとに発表の準備や リハーサルを行う。	☆曲に合わせて 自分たちが演奏 できるようにな	★原曲のポリュ ーム、楽器のセ ッティングなど

			ったか。	についてアドバ イスする。
展 開	◦同時演奏体験 のグループ発表	◦グループごとにCD（または 練習で使用したテープ）に合わ せて演奏する。	☆曲のムードや 特徴をとらえら れたか。	★演奏技術の上 手下手を問うの ではなく、原曲 をどれだけ深くと らえているかに 着目する。
ま と め	◦原曲の鑑賞	◦2曲全曲を聴く。	☆自分自身や友 達が演奏したこ とによって原曲 を身近に感じら れたか。 ☆前時に部分的 に聴いた時に比 べ、より深く味 わえたか。	★自分のグルー プが担当した曲 だけでなく、も う一方の曲につ いてもしっかり 鑑賞させる。

7. 考察と課題

同時演奏体験という学習活動では、グループの中に音楽的にリーダーシップのとれる生徒がいるかないかで、発表内容に差が出てしまった。しかし同時演奏をするためには、演奏する楽曲の特徴を十分に理解する必要に迫られるため、どの生徒も今まで以上に注意深く聴こうとする姿勢を見せていた。また、クラシック音楽にはほとんど興味を示すことのなかった生徒が、この授業の後には、自分から他の楽曲も同じようにして聴いてみたいという感想を述べるなど、自主的に鑑賞しようという気持ちが芽生えて来たようであった。

本事例を実施する際に留意しなければならない点として、グループ練習の時の場所の問題がある。音楽教室のみで活動させると、各グループが一斉に様々な音を出すために、生徒は混乱してしまうようであった。事前にいくつかの場所を確保し、生徒がグループの活動に集中して取り組めるよう準備しておく必要がある。

指導事例3と指導事例4の共通のまとめ

生徒の意欲的な鑑賞態度を育成するためには、知識理解を優先させた、いわゆる教師主導型の授業から、表現活動との関連を図り、生徒が活動する場面のある授業展開への転換を図ることが必要であると考え、事例3及び事例4のような指導事例を研究した。事例3と事例4は、共に鑑賞の領域を学習の中心に据えながらも、器楽による表現活動との関連を図ったものである。

鑑賞の授業における生徒の鑑賞の仕方には様々なタイプがみられるが、我々研究員の目指すものは、「楽曲に興味・関心をもって、自ら聴こうとする」鑑賞態度を育成することである。

この二つの事例を作成するに当たり、はじめに検討した内容は、「自主的に鑑賞しているか」という評価を具体的にどのような方法で行うか、ということであった。これらの事例では表現活動との関連を図っているが、楽器の演奏技能や表現活動への取組みの意欲を評価の中心に据えることは、鑑賞の評価そのもののねらいから外れてしまう。そこで、楽曲の鑑賞と表現活動との同時体験や旋律の器楽表現などを行う前と後における、楽曲の鑑賞に対する興味・関心、意欲を評価することが適切であると考えた。評価の方法には、観察法・記述法・テスト法などが挙げられるが、これらの事例においては、生徒の提出物や相互評価を活用できるよう工夫した。

実際に授業を行ってみると、事前には予想されなかった問題がいくつか浮き彫りにされてきた。第一の問題は、二つの事例が、共に複数の楽曲を教材として取り扱ったために、一つ一つの曲に対する生徒の学習の深化が十分に図れなかったことである。オーケストラに合わせて演奏を体験する場面にもう少し時間をかけた方が、演奏についての成成感は深まったであろうし、生徒の楽曲に対する意識も高まるように思えた。日頃の生徒の学習状況に応じて、教材を一曲に絞った方がよい場合もあるであろう。ただし、生徒の興味・関心に対応するためには、複数の楽曲を取り扱った方が良いので、指導方法についての工夫を更に図っていきたいと考える。

第二の問題は、どちらの事例も、学習のねらいを生徒にしっかりと把握させておかないと、表現活動主体の授業に陥りやすいということである。鑑賞と表現の同時体験などの学習場面の後に、生徒の意識を鑑賞そのものへ向ける工夫をうまく図らないと、鑑賞の授業そのもののねらいから外れてしまうおそれもある。

実証授業を実施した結果、生徒の反応は我々の期待していたとおり、時間を追うにつれて興味・関心を示し始めた。授業後のアンケートによると、特に事例3では、メロディーをリコーダーで演奏する前と後とでは、好きな曲目の順位が入れ替わっている生徒がほとんどであった。その理由として、「初めは良い曲だとは思わなかったが、練習しているうちにメロディーの美

しさを感じるようになった」、「初めはメロディーしか知らなかったが、オーケストラ演奏の鑑賞では雄大さを感じられた」、「もう一度聴かせて欲しい」などが挙げられている。リコーダーで演奏しているうちに、「その曲を知っている」から「良い曲だ」という意識に変わり、更に、「鑑賞したい」という意欲が喚起されていくようである。

各学校でそれぞれの事例を扱う際には、各学校の施設・設備の状況や、生徒の楽器演奏技能の習熟の状況に応じて選択して扱っていただくとよい。リコーダーの学習をあまり経験させていない学校において事例3を扱うには、この指導内容に入る以前の準備段階として、リコーダーの演奏技能を習得させるために多くの時間を必要とするであろう。また、打楽器類があまり調っていない学校において事例4を行う場合には、手作り楽器の使用などの工夫も必要となると思われる。

主題設定の理由にも述べたとおり、これらの事例は、教材の選択を工夫することにより、どの学年でも取り扱うことが可能である。この長所を生かして、例えば、音楽史を学習するためのステップとして事例3を行う場合には、各時代の楽曲を教材として選択すれば、それぞれの時代の楽曲の特徴をつかみやすいし、つながりも見えてくる。また、器楽合奏や創作、即興表現へのステップとしては、どちらの事例も考えられる。つまり、題材や領域にとらわれずに、ねらいや活動内容が自由に設定できる利点がある。

この二つの事例の実践を通して、「興味・関心をもって、自ら聴こうとする」鑑賞態度が、わずかではあるが、生徒に芽生えてきたように思われる。今後、更に研究を深め、生徒が生涯を通じて音楽を愛好し、豊かな生活を送ることができるように、「聴く喜び」を味わわせる指導の充実を図っていきたいと考える。

Ⅳ まとめと今後の課題

「生涯にわたって音楽を愛好する心情」の育成を図ることは、音楽科教育の大きなねらいの一つである。このことは、本年度の研究員一同が、日頃の教育実践の場においても常に念頭に置いていることであった。そこで、本年度の研究主題の設定に当たっては、上記のねらいを達成するための中学校の音楽科指導における重要な役割は何か、という観点から検討を重ねていった。

中学生の年代は、生徒一人一人が自ら好む音楽をもち始める時期である。このような音楽への興味・関心を大切にしつつ、更に、幅広い音楽への愛好心へと発展させるには、何よりもまず、生徒が主体となって取り組み、学習する喜びを味わうことができるような授業にすることが大切であると考え、標記の主題を設定した。

「自主的に活動できる生徒」の育成は、例えば、校内の合唱コンクールにおけるリーダーのような、一部の生徒のみでなく、すべての生徒に対して行われなければならないものである。そのためには、合唱中心の表現活動、楽曲の聴取のみの鑑賞活動といった授業から、表現と鑑賞、あるいは、歌唱、器楽、創作の活動の関連を図った授業への転換を図り、生徒一人一人の興味・関心に応じるとともに、個々の生徒が活動し活躍できる場面のある指導内容・方法にする必要がある。

このような視点から、歌唱表現を中心に扱ったもの1事例、器楽表現を中心に扱ったもの1事例、鑑賞を中心に扱ったもの2事例を作成した。

以下に本年度の研究の成果と今後の課題についてまとめることにする。

成果

- (1) 生徒が自分の得意な分野で活動できるので、より大きな喜びを得ることができた。
- (2) 生徒が自由に音楽作りの工夫を重ねた結果、自分の作りたい音楽を自分で見つけることができた。

今後の課題

「自主性を生かす」ことが時には「放任する」ことにもつながりかねない。そのような場合には、生徒が学習の目標や方向を見失うおそれもある。「自主性を生かす」授業こそ、綿密な指導計画が必要である。実証授業においてこういった問題点にぶつかった場面も見られたので、今後、更に研究を深め、一層充実した指導内容・方法の確立を図っていきたいと考える。